



Newsletter

NO.2

OCTOBER 2001

第1回 特別展 古代からのおくりものー鹿大に眠る遺跡ー



鹿児島大学構内遺跡出土土器ー成川式土器ー

鹿児島大学郡元キャンパス内では古墳時代後期（A.D.6世紀代）の大規模な集落の存在を示す遺構・遺物が発掘調査によって大量に発見されている。そのうちで、もっとも代表的な遺物が「成川式土器」と総称される様式の土器である。南九州独自のスタイルをもち、当時の生活のありさまから地域個性と社会関係までも分析・考察しうる良好な研究材料であるとともに、文化財という国民共有の財産である。とくに理学部2号館増築にともなって出土した土器は古墳時代の南九州を代表する資料群である。

館長挨拶

平成13年4月に鹿児島大学総合研究博物館が設置されましたが、これを記念して、第1回特別展「古代からのおくりもの―鹿大に眠る遺跡―」を実施することになりました。

現在、若者達が集い、語らい、勉学に励む鹿児島大学キャンパス一帯は、いにしへの縄文時代から、人々が集落を構え、土器をつくり、田んぼを耕し、獲物を追った生活の場であったことが、これまでに発掘調査された多くの資料からわかっています。

近年、発見された国分市の上野原遺跡は「約9500年前の縄文時代の最大、最古級の集落遺跡」として知られていますが、同じ古さの遺跡は桜ヶ丘キャンパスを含む南九州の各地から知られ、南九州は縄文文化の先進地域であったことが次第に明らかになりつつあります。

現在の郡元キャンパスは、縄文時代から近代までの、

大塚裕之

南九州の代表的な複合遺跡で、なかでも約1500年前の古墳時代の集落遺跡として知られています。

桜ヶ丘キャンパスからは1万年をさかのぼる旧石器時代から縄文時代草創期・早期、弥生時代の遺構・遺物が確認されています。

このように、現在の鹿大のキャンパス一帯と周辺の市街地はいにしへの縄文時代から悠久の月日を重ねること1万年あまり、現在でも人々の生活の場であり勉学の場所でもあるわけです。この機会に鹿児島大学構内遺跡からの出土品を、多くの皆様に御覧いただき、自然豊かだったこの大地に、しっかりと足をすえて、力強く生きた古代人の息吹きを感じていただけたら幸いです。

最後になりましたが、この展示を企画するにあたり、御指導・御協力いただきました関係各位に対し、心から御礼申し上げます。

鹿児島大学のキャンパスに眠る遺跡が刻まれた大地

鹿大のキャンパスには、沖積平野の郡元、下荒田とシラス台地上の桜ヶ丘の3地区があります。シラス台地は、およそ2万5千年前に始良カルデラ（現在の鹿児島湾奥部）を形成した大噴火によって噴出・堆積した入戸火砕流堆積物（一般にシラスと呼ぶ）と、それを覆う、おもに桜島起源の火山灰層から成り立っています。とくに、およそ1万1千年前に噴出した“桜島薩摩テフラ（新期火山灰および軽石層）”が1m前後の厚さで、入戸火砕流堆積物や桜島初期の火山灰層の侵食面を覆って分布しています。標高70m前後に広がる桜ヶ丘キャンパスでは、数m掘り下げると“桜島薩摩テフラ”が現れます。

一方、沖積平野の下荒田地区では、“桜島薩摩テフラ”が地下47~48m（海面より45~46m）に分布し、その直下に古土壌の存在が確認されました。鹿児島市地盤図編集委員会は、鹿児島市のボーリング資料をまとめて、図に示した沖積層基底面の等高線図を作成しました。この図は、およそ1万6千年前のウルム氷期の地表面の深さを表わしています。この地表面の地形は“桜島薩摩テフラ”が降り積もる直前の地表面とほとんど変わりません。

これらのことは、“桜島薩摩テフラ”の噴火以前にシラス台地の上に住んでいた縄文草創期の人達が、下荒田や郡元地区では、今の地表より45m前後も下の、かつての地表で生活していたことを示しているのです。

もう一つ興味深いことがあります。それは、縄文草創期の地表を流れていた古甲突川が、今の西鹿児島駅付近から鹿児島大学農学部付近を通り、県庁のあたりを流れていたことです。当時の海面は今より60~70mほど下がっていましたから、河口はもっと先です。

その後、海面は急速に上昇し、今から9,500年前には今より30mほど下に、7,000年前には、ほぼ今の海水準になったと考えられ、縄文の民は海の侵入によって山手へ移り住んだはずで、草牟田で行なわれたボーリングでは、地下15m前後から海であった証拠の貝殻が見つかります。縄文時代の人々は城山や原良、紫原の上から眼下に広がる内海を眺めながら生活したことでしょう。その海が、繰り返される洪水によって埋め立てられ、今のような沖積平野が出現したのは、ボーリングコアから見つかる海に棲む貝の分布からみて2,000年前より後のことのようにです。

（大木公彦）

1万数千年前の地表面の深さ(単位はm; 鹿児島市地盤図編集委員会、1995による)



鹿児島大学キャンパスの発掘調査 ～鹿児島大学構内遺跡～

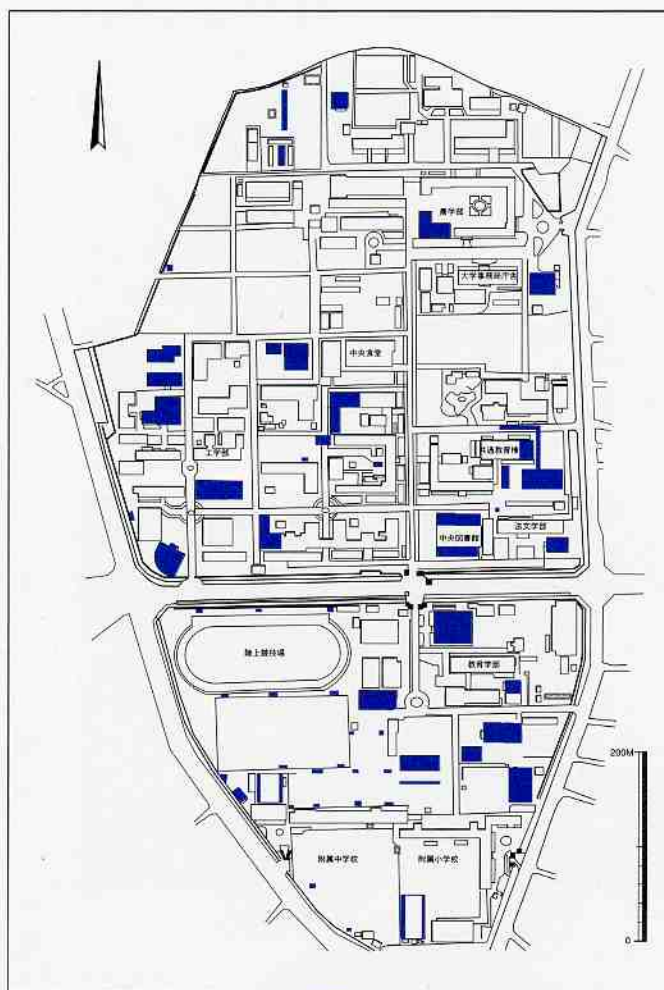
鹿児島大学は歴史上のさまざまな時代の遺跡の上に所在します。これまで主に校舎などの建設に伴う事前調査の際に県教育委員会、法文学部考古学研究室、埋蔵文化財調査室によって数多くの発掘調査が実施され（85年以降はすべて埋文調査室による）、重要な成果を上げてきました。ここでは明らかになった鹿大の地下を見つめ、その成果の一端を紹介したいと思います。

郡元キャンパスにおける発掘調査

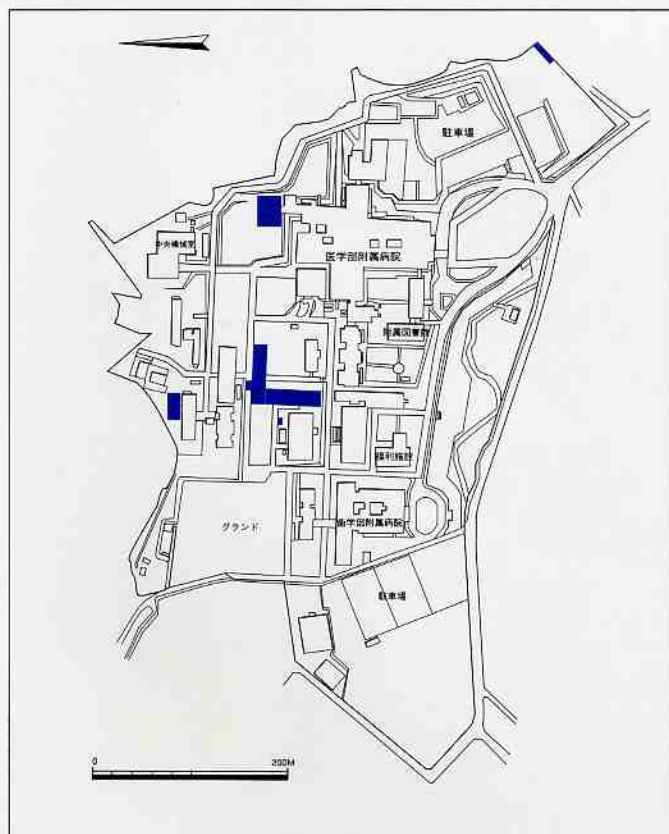
郡元キャンパスでの遺跡の確認は1951（昭和26）年に考古学者・河口貞徳氏が教育学部運動場において古墳時代住居跡を発掘調査したことに始まります。その後の調査によって現在では、縄文時代から近代までの複合遺跡であることが判明しています。

とくに、ここは1400～1500年ほど前の古墳時代の集落遺跡として知られています。遺構としては住居跡群や、巨大な河川と水利施設、多量の土器を中心とする遺物などが出土しています。ここでの発掘調査によって南九州の古墳時代の生活や文化を考える上で重要な成果が多数確認されています。

そのほか弥生時代の川と水利施設、水田跡なども確認され、二千数百年前に日本列島に伝わってきた初期の水田稲作・農耕文化が把握できる重要な遺跡となっています。詳細については、後述します。



郡元キャンパスの発掘調査地点（■の部分）



桜ヶ丘キャンパスの発掘調査地点（■の部分）

桜ヶ丘キャンパスにおける発掘調査

桜ヶ丘キャンパスは台地上に位置し、複数の火山灰が厚く堆積する南九州特有の地層からなります。ここは旧石器時代～弥生時代までの複合遺跡となっており、旧石器時代～縄文時代草創期の遺構・包含層、縄文時代早期の住居跡・集石遺構、弥生時代の住居跡群などを確認しています。

唐湊寮の遺跡

学生寮は、郡元キャンパスの西、鹿児島市唐湊（からみなと）に位置しますが、掘削工事に伴う立会調査で、縄文時代後期の指宿式土器などが出土しています。

入来牧場の遺跡

薩摩郡入来町にある農学部付属入来牧場では分布調査によって縄文時代の遺跡であることが確認されています。石鏃（いしやじり）などの石器が多数採集されています。

これらの遺跡および出土遺物は国民共有の財産である文化財です。鹿児島大学はその保護と活用を社会的責任の一つとして負っています。

縄文時代の鹿大キャンパス



旧石器時代～縄文時代草創期の落とし穴



縄文時代早期の住居跡

鹿児島大学構内遺跡では土器や石器などの「遺物」から、郡元・桜ヶ丘ともに縄文時代から人が活動していたことが確認されています。なかでも縄文時代の生活の痕跡である「遺構」はこれまで桜ヶ丘キャンパスで多数確認されています。

医学部保健学科地点ではおよそ1万1000年前の桜島噴火による薩摩火山灰の下層から谷筋に沿って落とし穴が見つかりました。旧石器時代の終わりから縄文時代草創期頃のもので、落とし穴は動物を追い込み、落とす狩猟用のもので、鹿大キャンパスで今までに発見されたもっとも古い人間活動の痕跡です。また、この時期の石鏃(石のやじり)や細石刃という槍のような道具の刃として使う石器も出土しています。

難治性ウイルス疾患研究センター地点の調査では、縄文時代早期(9500年前)の集石遺構が見つかりました。また、医学部受水槽地点では、ほぼ同時期の竪穴住居跡が見つっています。受水槽と難治性ウイルスセンターとは約70mの距離にあることから、広範囲に同時期の遺構が存在すると考えられます。これらは国分市上野原遺跡の集落と同時代のものです。

郡元キャンパスの工学部付近には縄文時代の河川があったと考えられます。ここでは縄文中期(4000～5000年前)や晩期(3000～2300年前)の土器や石器などが見つっています。なかには石製のペンダントもみられます。

また、稲盛会館地点では縄文中期の泥炭層からイネ化石(ブランドオパール)が確認されました。日本列島におけるイネの起源問題に迫る重要な資料です。



縄文土器



縄文時代の石器

弥生時代の鹿大キャンパス

弥生時代は狩猟採集の縄文時代から新たに朝鮮半島に系譜をもつ農耕社会へと移行した大変革の時代です。

この縄文時代から弥生時代への転換は紀元前300年頃に起こりました。郡元キャンパスはこの移行期の遺物が出土している南九州では数少ない遺跡の一つで、弥生文化の開始・展開を考える上で重要です。

理学部2号館増築(釘田第8)地点では朝鮮半島から渡ってきた人々の子孫が作ったとみられる擬朝鮮系無文土器と呼ぶ土器の破片が出土しており、朝鮮半島に出自をもつ弥生人もこの地にやってきたことがわかります。

地域共同センター地点の調査では弥生時代中期後半(紀元前1世紀頃)の河川と多量の木杭列による長さ15m、幅2mにわたる大規模な堰堤施設も発見されています。これは水田経営にかかわる利水施設だと思われます。

また、工学部校舎の発掘調査では弥生時代中期(紀元前2～1世紀)もしくはそれ以前の稲株痕とみられる穴を多数確認しており、ここには水田が営まれていたと考えられます。

教育実践研究指導センター地点の調査でも多量の土器が出土しています。その中には愛媛県中予地域などの他地域からもたらされたとみられる土器も出土しており、郡元に住んだ弥生人の広範な交流活動がうかがえます。



弥生時代の河川杭群



弥生時代の木製品



弥生土器

さらに、弥生時代に特徴的な稲刈りに使う石庖丁などの石器や大地を耕す木製の鋤などといった、この地での弥生時代農村の経営にかかわった道具も出土しています。

一方、丘陵上にある桜ヶ丘キャンパスでも弥生時代前期～中期前半(紀元前3世紀)頃の住居跡などが確認されており、土器や石鏃のほか、碧玉製の管玉といったアクセサリーなども出土しています。弥生時代における桜ヶ丘での生業がどのようなものであったかは、まだわかっていませんが低地の農村とは異なり、縄文時代以来の人々が狩猟採集を中心とする生活スタイルをもっていたかも知れません。

古墳時代の鹿大キャンパス

これまでの大学構内の発掘調査でもっとも多く出土している遺構・遺物が古墳時代のものです。

古墳時代とは西暦3世紀半ば頃から7世紀初頭頃の日本列島全体で権力者のために前方後円墳などの大きなお墓を作り、国というかたちの出来はじめた時代です。大隅半島には前方後円墳も多く存在しますが、薩摩半島では古墳はほとんど見つからず、地域独自の埋葬形態をとっています。

郡元キャンパスは鹿児島県の古墳時代を代表する集落遺跡です。とくに古墳時代の遺構・遺物は残りがよく、南九州の古墳時代を解明するための良好な基礎資料を提供できる遺跡です。

これまでの発掘調査では共通教育棟1号館増築（釘田第1）地点・理学部3号館地点・総合教育研究棟・共同溝地点といった理学部から法文学部にかけての北の集落域と教育学部運動場西側から附属中学校一帯に広がる南の集落域との2つの集落域が確認されています。これらは6世紀後半を中心とする竪穴住居跡群などからなっています。



古墳時代の住居跡群



古墳時代の土器集積遺構



古墳時代の竪穴住居跡

また、理学部2号館から地域共同センターを結ぶ地域には東西方向にこの時代の大規模な河川が流れていたことがわかっています。その中には巨大な堰が作られ、周囲からは大量の遺物も出土しており、北の集落の生活に密接した川であったと考えられます。

理学部3号館地点では500㎡の範囲に27軒、共通教育棟1号館増築地点では360㎡に30軒、総合教育研究棟・共同溝地点でも1800㎡の範囲に101軒もの竪穴住居跡が確認されました。これらの住居跡は重なり合い、密集するという特徴があります。何度も同じ場所で建て替えられているのです。長期にわたって定住していたことがわかります。

またこれらの竪穴住居跡は残りがよく、柱や板や炉の痕跡、ベット状の高まり、屋内に仕切りをもつ住居なども確認されています。なかには、四角ではなく張り出し部をもった独特の形態をした建物もあります。

そのほか、総合教育研究棟地点で確認された土器集積遺構は、直径約30mにわたって、土器を中心とする古墳時代の遺物が山積みされていたものです。土器などの遺物は収納箱約350箱分にのぼりました。

図書館増築地点調査の際には集落を区画するとみられる溝も確認され、集落の状況がかなり具体的に判明しつつあります。

成川式土器と南九州の古墳時代

郡元キャンパスでも多量に発見されている南九州の古墳時代を代表する土器を「成川式土器」と総称しています。

古墳時代の日本列島の多くの地域では土師器という近畿地方中央部で作られた土器の影響を受けた土器を用いるのが一般的です。

ところがこの成川式土器は土師器の影響をほとんど受けず、この地域の弥生時代の土器の系譜の延長上に作り続けられた土器です。土師器とはまったく異質な土器にさえみえます。

形・文様・作り方、いずれも他の地域にはみられない特徴をもっています。なかでも代表的な特徴は壺(口のすぼまった貯蔵用土器)や甕(口の広がった煮炊き用の土器)にみられる帯ひも状に貼り付けた文様です。このような貼り付け文様をもつ



成川式土器——祭り用ミニチュア土器

土器は古墳時代には南九州以外に存在しません。甕のくびれのないバケツのような形に脚台が付くのも独特です。

また、いずれの土器も造りが厚く重みがあります。古墳時代の土師器はきわめて薄く軽い造りを特徴としており、これとは作り方の技法が大きく異なっています。さらに、いろいろな形の壺や鉢や高杯、甕と鉢の折衷型など、形態ごとの規格が比較的ルーズで、多様な形態をもつという特徴もあります。

理学部2号館増築(釘田第8)地点はもっとも多くの成川式土器を出土した遺跡です。ここでは大規模な河川の堰がみつかりその一帯から日常生活の土器とともに祭りに使われたとみられる小型のミニチュア土器や文様で飾られた大型の壺などが大量にみつかりました。完全な形の土器だけで、その数1000点は下らないともいわれております。この場所が古墳時代の郡元の人々にとって特別な場所であったと思われます。

もう一つ、成川式土器とともにこの地域に特徴的な遺物として軽石加工品があります。船のような形のものやアワビにそっくりな形のものなどがあります。また孔をあけたり、線を彫っただけというものもあります。これらの用途も実用的なものではなく、おそらく祭りの道具であろうと思われます。軽石が身近な鹿児島県ならではの道具でしょう。

郡元の古墳時代集落では、成川式土器のような伝統的な道具を持ち続ける一方、須恵器といったこの時代に新しく現れた広域流通品も入手しており、新たな情報を受容しつつ自分たちの文化を築いていた人々の姿が浮かび上がってきます。このように郡元キャンパスは6世紀頃、南九州の個性的な社会・文化を代表する遺跡だといえます。



古墳時代の軽石加工品



成川式土器

古代以降の鹿大キャンパス

古墳時代より後では、平安時代や鎌倉時代の土器や陶磁器が農学部・工学部・教育学部などの発掘調査で出土しています。

土器には回転台土師器という古代後半から中世初頭の全国的に共通する技法で作られた土器のほか、中国からの輸入陶磁器である青磁や白磁などが出土しています。

また総合教育研究棟地点では中世の畝や溝など畑の遺構、連合農学研究科地点では江戸時代の水田遺構が確認されており、中・近世の郡元キャンパスは生活域ではなく、生産域となっていたようです。

江戸時代では肥前産磁器(有田など)や薩摩焼などの陶器のほか土製の泥メンコや鳩笛といったおもちゃ類、キセル、寛永通宝なども出土しています。また明治時代以降でも陶磁器などのほか戦前の銃弾など時代を象徴する遺物が出土しています。

鹿児島大学構内は長い期間に渡る人間活動の舞台として重要な資料を埋蔵した遺跡です。今回の企画を通して足下の歴史とその研究に興味を持っていただければ幸いです。(橋本達也)



古代以降の出土遺物

●博物館行事予定

■10月29日～11月28日

特別展「古代からのおくりもの—鹿大に眠る遺跡—」

於 鹿児島大学郡元キャンパス 総合教育研究棟 2F
プレゼンテーションホール

開館時間／9:30～17:00(期間中全日開館)【入場無料】

協力／鹿児島大学埋蔵文化財調査室

後援／鹿児島県教育委員会・鹿児島市・鹿児島市教育委員会

■11月26日

鹿児島大学総合研究博物館 創設記念式・記念講演会

鹿児島大学総合教育研究棟1Fエントランスホール・201号室
創設記念式15:00～ 記念講演会15:30～17:00

■11月22日

第2回 生命化学学術講演会 「医薬品開発と生物統計」

理学部生命化学科生化学研究グループ主催・総合研究博物館後援
講師／菅波秀規氏(興和株式会社 臨床解析部 統計解析課)

●お知らせ

■9月17日より事務部門(研究協力課)の移動に伴い、下記のように住所表記が変わりました。

■博物館では展示や標本整理など、多岐にわたる業務をお手伝いいただくボランティアを募集しています。興味のある方は一度おたずね下さい。

■総合研究博物館は12月中旬より、旧・多島園研究センター建物で活動を開始いたします。理学部中庭の白い平屋の建物です。ここでは展示などを行いませんが、ご質問など、お気軽におこし下さい。

鹿大構内遺跡に関する情報は、埋蔵文化財調査室のホームページでも御覧になれます。<http://maibun.knit.kagoshima-u.ac.jp>

■発行／2001年10月19日 ■編集・発行／鹿児島大学総合研究博物館 〒890-0065鹿児島市郡元1-21-30
TEL:099-285-8141 FAX:099-259-4720 <http://sci.kagoshima-u.ac.jp/~uchik/museum-top.htm>